

=====

アントニオ猪木 FAQ (よくある質問)

=====

【INDEX】

1. プロフィール・基本情報
2. プロレスラーとしての経歴
3. 名言・エピソード
4. 異種格闘技戦
5. 政治家としての活動
6. 晩年・逸話

=====

■1. プロフィール・基本情報

Q1-1: アントニオ猪木の本名は何ですか?

A: 本名は猪木 寛至(いのき かんじ)です。1943年2月20日生まれ、神奈川県横浜市出身。身長190cm、体重102kgでした。ブラジルでの移民時代を経て、日本に帰国後プロレスラーとなりました。

Q1-2: なぜ「アントニオ」という名前なのですか?

A: ブラジル移民時代に名乗っていた名前がアントニオでした。プロレスラーデビュー時に、ブラジル仕込みの格闘技を売りにするため「アントニオ猪木」というリングネームを採用しました。師匠の力道山から命名されたと言われています。

Q1-3: 出身地はどこですか?

A: 神奈川県横浜市出身です。しかし、12歳の時に家族と共にブラジルに移住し、サンパウロ近郊で農業に従事していました。この時の苦労が、後のファイトスタイルや精神力の源になったと本人も語っています。

Q1-4: いつ亡くなったのですか?

A: 2022年10月1日に、心不全のため79歳で逝去されました。晩年は心臓の病気を患っていましたが、2020年頃から車椅子生活を送っていました。葬儀には政財界、スポーツ界から多くの人々が参列し、その功績を偲びました。

=====

■2. プロレスラーとしての経歴

Q2-1: プロレスラーとしてのキャリアはいつから始まりましたか?

A: 1960年、17歳の時に力道山にスカウトされ、日本プロレスに入門しました。同年9月30日にデビュー戦を行い、ジャイアント馬場とともに「黄金のコンビ」として活躍。力道山の死後、1972年に新日本プロレスを旗揚げしました。

Q2-2: 新日本プロレスを設立したのはいつですか?

A: 1972年1月13日に新日本プロレスリング株式会社を設立しました。当時の日本プロレス界に新しい風を吹き込み、ストロングスタイルを確立。テレビ中継を積極的に活用し、プロレス人気を不動のものにしました。

Q2-3: 代表的な必殺技は何ですか?

A: 最も有名なのは「卍固め」(スコーピオン・デスロック)です。他にも、延髓斬り、アントニオ猪木式卍固め、コブラツイスト、裸絞め、腕ひしぎ逆十字固めなど、関節技を中心とした技を得意としていました。打撃技では「闘魂ビンタ」も印象的でした。

Q2-4: IWGPとは何ですか?

A: IWGP(International Wrestling Grand Prix)は、猪木が1983年に創設した世界最強を決める戦いのコンセプトです。現在のIWGPヘビー級王座の前身となる大会で、世界中のトップレスラーが参戦しました。新日本プロレスの象徴となっています。

Q2-5: 引退試合はいつでしたか?

A: 1998年4月4日、東京ドームで引退試合を行いました。相手はドン・フライ。試合後の引退セレモニーでは「元気ですか～!」「元気があれば何でもできる!」という名セリフを残し、4万人の観衆に別れを告げました。この試合で背骨を骨折していたことが後に判明しました。

■3. 名言・エピソード

Q3-1: 「元気があれば何でもできる」はいつ生まれた言葉ですか?

A: 1989年の東京ドーム大会から使い始めた言葉です。試合前の煽りVで「元気ですか～!」と観客に問いかけ、「元気があれば何でもできる!」と続けるのが定番となりました。この言葉は猪木の代名詞となり、引退後も多くの人々を勇気づけています。

Q3-2: 「道」とはどういう意味ですか?

A: 猪木が晩年よく使った言葉で、「人生は道である。迷ったら前に進むしかない」という哲学を表しています。著書『馬鹿になれ』『道』などでも、この思想を語っています。プロレスだけでなく、人生そのものに対する姿勢を示した言葉です。

Q3-3: 「1、2、3、ダーツ!」の由来は?

A: 試合前の気合い入れや、ファンとの掛け合いで使われた掛け声です。猪木自身が「3まで数えて、ダーツと気合いを入れれば、何でも乗り越えられる」と語っていました。現在も新日本プロレスの選手やファンの間で受け継がれています。

Q3-4: 「燃える闘魂」の意味は?

A: 猪木のニックネームであり、彼の闘争心と情熱を表す言葉です。どんな困難にも立ち向かう不屈の精神、観客を熱狂させるカリスマ性を象徴しています。新日本プロレスのキャッチフレーズとしても長年使われてきました。

Q3-5: 有名なビンタエピソードを教えてください。

A: 「闘魂注入」と称して、多くの著名人や若手レスラーにビンタをしてきました。タレントの浜田雅功、格闘家の須藤元気、政治家など、ジャンルを問わず実施。本人曰く「愛のあるビンタで、相手に活力を与えるため」とのこと。現代では問題視されそうな行為ですが、当時は猪木流の激励として受け入れられていました。

=====

■4. 異種格闘技戦

=====

Q4-1: モハメド・アリ戦について教えてください。

A: 1976年6月26日、日本武道館で「格闘技世界一決定戦」として実現しました。ボクシングの元世界ヘビー級王者アリと対戦。猪木は寝そべってアリの足を蹴り続ける戦法を取り、15ラウンド終了時点で判定引き分け。賛否両論を呼びましたが、格闘技史上最も有名な一戦となりました。

Q4-2: なぜアリ戦で寝転がって戦ったのですか?

A: 試合ルールが大幅にアリ側に有利に変更されたためです。猪木側の主張した関節技や投げ技が大幅に制限され、事実上のボクシングルールに。そこで猪木は、アリのパンチが届かない位置から足を攻撃する戦法を選びました。結果的にアリの足にダメージを与え、引き分けに持ち込みました。

Q4-3: 他にどんな異種格闘技戦を行いましたか?

A: 数多くの異種格闘技戦を行いました。主なものは:

- ウィリー・ウィリアムス(空手家)
- ルスカ(柔道家、金メダリスト)
- アンドレ・ザ・ジャイアント(プロレスラー)
- レオン・スピングス(ボクサー)
- マサ斎藤(プロレスラー、異種格闘技ではないが名勝負多数)

これらの試合が、後の総合格闘技(MMA)誕生のきっかけとなりました。

Q4-4: 異種格闘技戦の意義は何でしたか?

A: 「どの格闘技が最強か」という永遠のテーマに挑戦し、格闘技の可能性を広げました。また、プロレスの枠を超えてスポーツとしての地位向上を目指しました。これらの試合は、後のPRIDE、UFC、RIZINなどの総合格闘技団体に大きな影響を与え、猪木は「MMAの生みの親」とも呼ばれています。

=====

■5. 政治家としての活動

=====

Q5-1: いつ政治家になったのですか?

A: 1989年に参議院議員選挙にスポーツ平和党から出馬し、当選しました。その後、1995年、2001年と計3回当選。2013年まで参議院議員を務めました。議員在職中もプ

口レス興行を続けるという異例のスタイルでした。

Q5-2: スポーツ平和党とは何ですか?

A: 猪木が1989年に設立した政党です。「スポーツと文化を通じて世界平和を実現する」という理念を掲げました。猪木のカリスマ性で注目を集めましたが、1996年に解散。その後、猪木は民主党、無所属などを経て活動しました。

Q5-3: 政治家としての主な活動は?

A: スポーツ外交を中心に活動しました。特に北朝鮮との関係構築に力を入れ、32回訪朝。平壌で「平和の祭典」としてプロレス大会を開催したり、拉致問題解決に向けた交渉に携わりました。賛否両論ありましたが、独自の外交ルートを持つ議員として注目されました。

Q5-4: イラクでの人質解放劇について教えてください。

A: 1990年の湾岸戦争時、イラクに取り残された日本人人質の解放交渉に尽力しました。サダメ・フセイン大統領と直接会談し、日本人人質41名の解放に成功。この功績は高く評価され、国際的にも注目されました。猪木の行動力と交渉力を示すエピソードです。

=====

■6. 晩年・逸話

Q6-1: 晩年はどのような状態でしたか?

A: 2020年頃から心臓の病気が悪化し、車椅子生活を余儀なくされました。全身性アミロイドーシスという難病も患っており、体力が徐々に衰えていきました。それでも最後まで「元気ですか~!」と声をかけるなど、闘魂を失わない姿勢を貫きました。

Q6-2: 家族構成は?

A: 結婚歴は複数回あります。最初の妻は倍賞美津子(女優)で、1971年に結婚しましたが1987年に離婚。その後、タレントの田鶴子と再婚し、息子が一人います。私生活では多くのスキャンダルもありましたが、プロレスへの情熱は変わりませんでした。

Q6-3: 後継者や弟子で有名な人は?

A: 新日本プロレスから多くのスター選手を輩出しました。主な弟子には:

- 藤波辰爾(第一の弟子)
- 長州力
- 蝶野正洋
- 武藤敬司
- 橋本真也
- 中西学
- 棚橋弘至

彼らが新日本プロレスを支え、猪木の遺志を継いでいます。

Q6-4: 引退後の活動は?

A: 新日本プロレスの会長職を務めるとともに、総合格闘技団体IGF(Inoki Genome Federation)を設立。また、政治家として参議院議員を務めました。講演活動も精力的に

行い、「元気があれば何でもできる」というメッセージを全国に届けました。

Q6-5: 猪木の功績をどう評価すべきですか?

A: 日本プロレス界の発展に最も貢献した人物の一人です。ストロングスタイルの確立、異種格闘技戦による格闘技の可能性拡大、スポーツ外交など、プロレスの枠を超えた活動を展開。「元気があれば何でもできる」という言葉は、今多くの人々を励まし続けています。彼の闘争心と挑戦する姿勢は、プロレス史に永遠に刻まれています。

Q6-6: 葬儀の様子は?

A: 2022年10月15日、両国国技館で「お別れの会」が開催されました。約9000人が参列。新日本プロレスの選手たちが棺を担ぎ、猪木の代表曲「炎のファイター」が流れる中、最後の別れを惜しみました。会場には「1、2、3、ダーッ!」の掛け声が響き渡りました。

=====

【追加情報】

=====

■テーマ曲

- 「炎のファイター」(作詞・作曲:馬飼野康二)が入場テーマ曲として有名
- 力強いメロディと「燃える闘魂」のイメージにぴったり
- 現在も新日本プロレスのイベントで使用されることがある

■著書

- 『馬鹿になれ』(1999年)
 - 『道』(2000年)
 - 『迷わず行けよ 行けばわかるさ』(2014年)
- など多数。人生哲学を語った内容が多い。

■名セリフ集

- 「元気ですか~! 元気があれば何でもできる!」
- 「迷わず行けよ 行けばわかるさ」
- 「道は、自分で作るもんだ」
- 「負けたら、そこで試合終了だよ」
- 「1、2、3、ダーッ!」

=====

このFAQは、アントニオ猪木氏を偲び、その功績を後世に伝えるために作成されました。

=====